

1920年代における内モンゴル近代知識人の文化活動
に関する一考察：蒙文書社を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: サラントヤ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010056

1920年代における内モンゴル近代知識人の文化活動に関する一考察

——蒙文書社を中心に——

東京大学大学院総合文化研究科・博士課程 サラントヤ

はじめに：問題の所在

モンゴル史研究の中で比較的新しい分野とされる近現代内モンゴル地域史研究において、最も重要な課題は何であろうか。これは「内モンゴル地域史研究」と言う研究分野そのものの確立にもつながる問題でもある。中央アジア研究者の宇山氏が「ある地域の研究をディシプリンとして確立させる際には、その地域に独特・固有な要素を抽出し、様々な事象の説明に応用する作業が行われるのが普通であろう」¹と指摘した通り、近現代内モンゴルに関する研究においても「内モンゴルのもの」への考察が求められる。しかし、長年に渡る清朝の統治や漢人の入植により複合的構造を持つ地域として形成された内モンゴルにとっては、「独特」で「固有」の要素を定めるのが必ずしも容易ではない。現在、部分的に残る伝統的な遊牧と定住農業が内モンゴル地域の基本的な特徴になっているが、それだけでは説明できない部分も多い。筆者は、内モンゴル近代知識人の文化活動を通して、彼らによる「民族」や「国家」言説の辿ってきた系譜について注目したい。

近代内モンゴル知識人に関する従来の研究は、主に文学史などにおいてなされてきた。そこでは、20世紀初頭のグンサンノルブの新式学校創設から中華人民共和国成立するまでを内モンゴルの「近代」として捉え²、文学史を著している。だが、実際の記述の多くはほぼ「5・4運動」以降の内容が中心で、それ以前の知識人の言動があまり考察されていない。また、結論として近代知識人を啓蒙的知識人だったと位置づけするが、その「啓蒙」思想の内実が具体化されずに曖昧のまま終わっている。さらに言えば、「近代化」の貢献者としてグンサンノルブを位置づけること自体が、「近代化」の定義をせざるにされているがゆえに学問的に無効である³との厳しい批判にも直面している。

文学史のほか、モンゴル民族通史や内モンゴル革命史の中でも、確かに近代知識人の存在に気づいているものの、それを民族解放運動と結びついて論じるのが稀である。通史類は19世紀末から20世紀初頭のモンゴル人の民族的覚醒の兆しを漢人の蒙地進出に対する遊牧民の蜂起に見出そうとする。しかし、これを「『民族主義的』決起として望みなきものであり、殆ど何時も蒙土喪失の増大と、よし住民が反乱に於いて能動的態度をとらなかった場合にも、支那軍隊によって虐待を受くることに終わった」⁴というラティモア氏の指摘を思い出せば、そうした見解についても再考する余地がある。また、通史では、1911年の外モンゴルの独立宣言及び同時期の内モンゴルの動向を主に王公階層と袁世凱政権とのやり取りを中心に論じる⁵。実際、モンゴルの社会構造は重層的な枠組みであり、支配層としての王公のほか、宗教指導者や平民といった様々な階層が存在していた。それに、清末以後に新式教育の導入によって新たな社会階層として登場した知識人層は軽視できない存在である。1910年代はまさに知識人や上流階層の青年たちが役割を果し始めた頃であった。当然、民族解放運動における知識人の役割も無視できない。

革命史の中では、内モンゴルの民族解放運動を「中国革命運動の一部」として位置づけ、主に中国共

¹ 宇山智彦：「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観—M.ドゥラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に—」『スラヴ研究』44号 P1。

² 内モンゴル近現代文学史の時代区分に関して、文学史の中では若干のずれがあるが、近年からグン王の学校教育の導入から1949年までが定説になっているようである。詳細は「サラントヤ2010」を参照されたい。

³ 中見立夫著：「『満蒙問題』の歴史的構図」、東京大学出版社2013年、P90。

⁴ オウエン・ラティモア著、後藤富男訳『農業支那と遊牧民族』生活社 1940年 P48。

⁵ 白拉都格其、金海ら『蒙古民族通史』（第5巻 上）内蒙古大学出版社 2010年 P246-407。

産党の指導を受けた知識人の活動が強調される。そのため、共産党の勢力がモンゴル地方に入る前の時期と終始その影響力が及ばなかった地域の状況が見逃されている。一部の知識人だけを軸にした研究では、同時期の知識人の中でも多様な立場、違った見方が存在していたことが見え難くなるだけではなく、民族解放運動の全体像も見えにくくなってしまふ。革命史に偏った研究傾向は、今日においても変わってない⁶。近代知識人研究をより深めるためには、「内モンゴル」地域を「中国周縁」としてだけではなく、モンゴル世界の一部でもあった地域、あるいは主体的な「内モンゴル地域史」を再認識し、様々なタイプの知識人を取り上げ、多角的な視点から考察する必要があるのではないか。

以上を踏まえながら、本稿では1920年代に北京で運営されていた「蒙文書社」(*Mongyol Bičig-ün Qoriya* 以下*MBQ*と略する)という出版社に焦点をあて、出版メディアや文化団体などに依拠して文化活動を行った知識人たちがどのような主張を繰り広げ、どれほどの影響力を持っていたのかについて分析する。*MBQ*とは、内モンゴル近代知識人によって結成された初の文化団体である。総経理のテムゲトは、内モンゴル最初の新式学堂となる崇正学堂の一期生で、20世紀初頭に来日したモンゴル人留学生の一人でもある。彼はまた、モンゴル語活字版を開発した最初のモンゴル人とされている。『テムゲト伝』⁷によれば、*MBQ*は総計10万冊の書籍を発行している。当時、*MBQ*は『モンゴルを新しく観る』⁸、『蒙古大観』⁹などによって日本にも紹介されたほか、ハイシツヒ¹⁰によってドイツにも紹介されている。また、1960年代に台湾の『辺境教育』¹¹でも紹介された。テムゲトは、活字版技術の開発や、*MBQ*における出版事業によって同時代のモンゴル青年に慕われ、近代知識人の文化活動に与えた影響は大きかった。*MBQ*の文化活動の諸相を明らかにすることで、1920年代の内モンゴル知識人の思想と行動を振り返り、内モンゴルにおける近代化の一側面を解明できるだろう。

I、先行研究の整理

近代内モンゴル知識人に関する研究は、20世紀80年代以後、内モンゴル文学史における紹介から始まったと言えよう。そこでは、近代内モンゴル知識人の文化活動が「中国革命運動の一部」として1919年の五四運動の影響の下で展開してきたという観点から論じるしかなかった¹²。しかし、モンゴル知識人が「5・4運動」の何を受容し、何を選択しなかったのか。また、「5・4運動」の中でモンゴル知識人の位置づけはどのようなものだったのかについてはほとんど触れられていない。当然ながら上述した両者の相互関係を具体的に分析しない限り、その論述も成り立たないだろう。

同時期において、近代内モンゴルにおける出版メディアに関する研究も注目されている。研究内容は、

⁶ 周太平：「内モンゴル近現代地域研究の新たな課題」、『アジア太平洋論叢』第15号、2005年11月30日 p121～129ボルジン・フスレ『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策1945～49年 民族主義運動と国家建設との相克』風響社 2011 p12。

⁷ Nayuyisayinküü, Narinyolküü : *Temgetu-yin namtar* (『テムゲト伝』)、内モンゴル科学技術出版社、1989年。

⁸ 石塚忠『モンゴルを新しく観る』三省堂、1932年。

⁹ 財団法人善隣協会調査部編、『蒙古大観』：常磐印刷株式会社、昭和十三年7月。

¹⁰ W・ハイシツヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』岩波書店、1967。

¹¹ 札奇斯欽編著『辺境教育』：蒙藏委員会編、台北、1961年。

¹² 内モンゴル近代文学史の編集は1981年の『蒙古族文学簡史』(中国語、齊木道吉、梁一孺、超永铎1981年)から始まり、2008年まで、8種類のテキストが出版された。その中で、『蒙古族文学簡史』(中国語)、*Mongyol ündüsüten-ü orčin üy-e-yin uran jokiyal-un toyimu* (『モンゴル族近代文学の概要』、Qasčimeg 1989年)、*Mongyol ündüsüten-ü orčin üy-e-yin uran jokiyal-un sinjilegen* (『モンゴル族近代文学研究』、Linsv 1991年)、*Mongyol ündüsüten-ü uran jokiyal-un teüke, orčin üy-e* (『モンゴル族文学史(近代) süyüge 1995年』)、『蒙古族文学史』(中国語)(第四卷榮苏和等 2000年)など五つのテキストにおいて内モンゴル近代文学史の時代を1919年から1949年までと区分した。当時、モンゴル文学史の編集工作が、高等学校に使用する教科書を提供する必要に応じた作業であり、編集者たちは主に20世紀60、70年代に編集された中国文学史を参考しながら、モンゴル文学史の時代区分や内容構想を規定していた。具体的に『中国文学史』(一、二、三、四：中国社会科学院文学研究所編、人民文学出版社、1962年)と『中国文学史』(一、二、三、四；遊国恩、王起、肅滌非、季镇淮、非振剛主編、人民文学出版社、1963年)の二つのテキストを主に参考していた。

主に定期刊行物に関する考証や紹介が中心であったが、それは近代知識人の活動を行う文化的な資源である出版メディアや、組織団体を根本的に把握する基礎作業として高く評価できる¹³。そのほか、『サイチョンガ』¹⁴、『テムゲト伝』、『プヘヘシグと彼のモンゴル文学』¹⁵、『プヘヘシグと「丙寅」誌の研究』¹⁶、『ヘシグ——一人のホルチンモンゴル人』(克・莫日根著、2001)などの著作は、各々の知識人を扱った面で先駆的な成果だったと評価できよう。とは言え、これらの著作も近代知識人に対して依然として「中国モンゴル民族の文化功労者・啓蒙者である」と言う通説に従い、活動そのものに関する具体的な分析が欠けている。勿論「啓蒙」と「復興」は近代内モンゴル知識人の文化活動の目的であり、方法でもあったと言えよう。その活動の動機、活動経緯における葛藤・苦悩・混迷など思想面での要因を軽視して、彼らの知識人としての志向を読み解くことは不可能であろう。

そうした中で、1990年代後半から内モンゴル近代知識人に関する資料の収集、整理が積極的に進み、『異草集—1931～1945年間蒙古文学作品選』(Ba/gereltii, 1998)、*Mongyol sudulul-un neberkei toil udq-a jokiyal* (*Mongyol sudulul-un neberkei toil nayirayulqu jöblel-ün mongyol udq-a jokiyal nayirayulqu jöblel*, 2002)、フフバートル博士論文—『漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成—中国領内のモンゴル語定期刊行物発展史に沿って—』、『フルンガー文集』(上下) (*čilayu*, 2006)、『民族古籍与蒙古文化』(全9期)(呼和浩特市民族事務委員会 2003～2006)、『内蒙国民旬刊影印校勘本』(*D/Čedeb, vang/Mandury-a* 2007)などが出版された。これらは、近代知識人の文芸作品及び各種類の出版物そのもの、あるいはその現存状況を公開したものであり、一次資料としての価値が高い。また、二木博史と広川佐保、内田孝、横田素子¹⁷らの日本所蔵の資料を用いた論文も同時期に発表された。これらの研究成果によって、近代内モンゴルにおける定期刊行物、知識人の文芸活動、留日モンゴル学生に関する新たな情報が数多く提供されるようになった。

近年、「内モンゴルにおける近代啓蒙思想とその活動」¹⁸、「満洲国期のモンゴルの知識人ヘシグの思

¹³ 内モンゴルではトゥイメル氏の研究が代表的である。彼は20世紀80年代以来、モンゴル語定期刊行物の目録作成・資料公開のほか、数多くの論文を発表し続けている。たとえば『建国前内蒙古地方報刊考録』(内蒙古自治区図書館編 1987年)という目録索引がある。論文には以下のようなものがある：「克興額考辨」、『蒙古学信息』1997年第4期p31-32；「民国年間蒙古出版史考辨」、『内蒙古師大学学報』(哲学社会科学版)、1999年2月、第28卷第1期p112-118；『蒙和報』研究』、『蒙古学信息』、2001年第3期p23-27、「偽満洲政府の第一総合性蒙文月刊『蒙和報』」、『蒙古学信息』、2002年第2期p32-35；「民国年間の几种蒙文旧報刊」、『蒙古学信息』、2002年第3期p35-40；「民国初年の『蒙文白話報』和『蒙文報』」、『内蒙古師大学学報』(哲学社会科学版)、2002年2月、第31卷第1期p17-19；「偽蒙疆時期的『文化專刊』和『蒙古文化』」、『蒙古学信息』、2004年第1期p46-50「喀喇沁克興額与蒙文鉛字印刷」、『内蒙古師範大学学報』(哲学社会科学版)、2006年1月、第35卷第1期

¹⁴ S/Sambu, Kücün : *saičungy-a* 内モンゴル人民出版社、1987年

¹⁵ Erdemtii buyantoytaqu nayirayulun : *Bökekesig kiged tegün-ü mongyol udq-a-yin suryal-un hural* 内モンゴル文化出版社1993年

¹⁶ Ba/Süke : *bökekesig kuged ulayan bar sedgöl-ün sudulul* 内モンゴル文化出版社2003年

¹⁷ 二木博史氏の「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」という論文は蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物の全体の状況をまとめた。そのうえ、当時のモンゴル語定期刊行物の現存について非常に詳しい情報を提供した。同氏の「満洲国時代のモンゴル人文学者エルデムトゥグスの新発見の作品」という論文で主にエルデムトゥグスの新発見の作品を紹介したが、関連するモンゴル語定期刊行物についても貴重な情報を提供した。そのほか、『内モンゴル社会科学』(モンゴル語版 2002年第一期)に掲載された「*sin-e-ber oldaysan kesingge-yin bütügel-ud*」(新しく発見されたヘシグ氏の作品)という論文では、『奉天蒙文報』及びそこに掲載された東モンゴル書局の創設者であるヘシグ氏の新発見の作品を初めて紹介した。広川佐保氏の「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」という論文は満洲国におけるモンゴル語定期刊行物を当時の特別な時代背景において、出版された年代順によって詳しく紹介した。そのほか、同氏の『1940年代の日本の対内モンゴル政策と「フフ・トグ」紙』(1997年)という論文がある。内田孝には『『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動』と「近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識——1931-1945年を中心として——」(博士論文)がある。前者は、『蒙古留日同郷会』の会誌である『新モンゴル』という雑誌の第二期を初めて紹介した論文である。後者は、時期を1931年から1945年までの14年間に限定したが、文学史の連続性を把握しながら、近代内モンゴル地域における文芸活動の全体に触れたと思われる。同氏は他にも「内モンゴルの詩人サイチンガの日本留学期における著作」など多数の論文を発表した。横田素子氏の「喀喇沁右旗学堂と日本人」「内蒙古喀喇沁右旗学堂生徒の日本留学」、「1906年におけるモンゴル人学生の日本留学」などの論文では、内モンゴルにおける近代教育の導入、初期の来日留学生について、紹介している。

¹⁸ ハスチチグ2009：「内モンゴルにおける近代啓蒙思想とその活動」2009年、東京外国語大学、修士論文。

想：『蒙文補助読本』と「青年たちへの提言」を中心に¹⁹、『『モンゴリン・ソニン・ビチク』(1909～1919)の発行状況と論調—近代モンゴルの活字メディアとナショナリズムの萌芽²⁰』など内モンゴル出身の留学生らによる研究が盛んとなっている。そのタイトルからも分かるように、これらの研究は、内モンゴル近代知識人の活動を独自の思想史やナショナリズム研究の文脈で検討しようとする試みである。

ところが、*MBQ*に関する研究は、上述の『テムゲト伝』のほか、文学史などでわずかに触れられてきたものの、*MBQ*で文化活動を行った知識人たちがどのような主張をし、それが如何なる影響力を持っていたのかについては、等閑視されている。しかも、既存の研究は、いずれもテムゲトのみを研究対象とし、*MBQ*に関わったほかのメンバーたちの参与に興味を示さなかった。さらに言えば、テムゲトに対しても、彼の主張や理念を読み取ろうとせず、彼の書き残した『自伝』²¹だけに基づき、モンゴル語活字版技術を開発したことだけが強調されている。勿論、テムゲトは*MBQ*の中心メンバーだが、*MBQ*という文化団体やそこから発行された様々な出版物に依拠して自らの思考を発表してきたほかのメンバーたちにも注目しない限り、*MBQ*あるいはテムゲトの文化活動を全体的に把握し、その内モンゴル近代思想史における位置づけを解明することは不可能であろう。

本稿では、主に以下の三つの論点に則して分析を試みたい。まず、テムゲトの経歴や*MBQ*の成立過程を概観し、その活動背景を確認する。次に、*MBQ*から発行された出版物がどのようなものであったかを分類し、その中のモンゴル語の教科書やモンゴル歴史書を具体的に分析することによって、*MBQ*のメンバーたちが理解する「モンゴル文化」の内実を明らかにしたい。最後に、1924年(民国13年)7月の全国教育展覧会における「蒙古教育組報告」を取り上げ、漢人知識人が強調する五族共和という枠の中のモンゴル教育とモンゴル知識人の主張する民族教育との齟齬について検討したい。

II、*MBQ*の出版活動

1、テムゲトの経歴について

*MBQ*の活動背景を理解するため、創設者のテムゲトの経歴を知っておくべきであろう。テムゲト(1888～1939)、漢姓は汪、漢語名は睿昌、字は印侯²²と言う。ジョソト盟ハラチン右旗の人である。1902年に、旗の王グンセンノルブ(以下以下グン王と略す)の創設した「崇正学堂」の一期生として入学した。同級生に同じくハラチン右旗出身のエンヘブリン(呉恩和、または恩和布仁)、アルタンオチル(金永昌)、イデーチン(伊徳欽、または徳欽)らがいた。翌年に、グン王は崇正学堂の学生から優等な学生を選び、東省鉄路ロシア学堂、保定簡易師範学堂、上海南洋中学学堂、北京陸軍貴胄学堂へとそれぞれ派遣した。テムゲトは、東省鉄路ロシア語学堂に派遣され、ロシア語を学んだ²³。さらに、テムゲトは、天津の某工場に派遣され、紡織、染色、製造業(石鹼・蠟燭・白墨の製造)、伝記メッキ、撮影などの技術を学んだ²⁴。このように、テムゲトはグン王による人材育成のプランに従い、様々な薰陶を受けながら知識人の道を歩んだ。だが、一人の知識人として精神的な成長を成し遂げるには、やはり1906～12年までの日本留学が最も大きかったと言えよう。

¹⁹ 烏雲 高娃2010：「満洲国期のモンゴルの知識人へシングの思想：『蒙文補助読本』と「青年たちへの提言」を中心に」『史海』57号、39-51、東京学芸大学。

²⁰ ボルジギン・ブレン2012：『『モンゴリン・ソニン・ビチク』(1909～1919)の発行状況と論調—近代モンゴルの活字メディアとナショナリズムの萌芽』(『内陸アジア史研究』第二十七号)。

²¹ テムゲト著：Mongyol üsüg-ün keb-i egüsgen geigülügsen kömön-ü öberün bey-e-yin temdeglel、蒙文書社、1925年。日本語で『モンゴル語活字技術を作った人の自伝』と訳す。本稿では『自伝』と省略する。現在、内モンゴル社会科学院に所蔵されている。本稿において、筆者は『テムゲト伝』に収録された影印版を利用した。『自伝』では、テムゲトは彼の少年時代から「蒙文書社」が成立されるまでのことを回想する形で書いた。

²² 漢語で「特木格図」、または「特睦格図」と表記されている。テムゲトの書いた作品などに、「テムゲト、汪睿昌、汪印侯」の三つの名前が使われている。

²³ Nayuyisayiküü, Narinyolküü著：Temgetü-yin namtar (『テムゲト伝』)、内モンゴル科学技術出版社、1989年。

²⁴ 刑志祥前掲載『喀喇沁右旗扎薩克親王桑諾爾布之略伝』

日本留学について、テムゲトの『自伝』²⁵、『喀喇沁右旗扎薩克親王貢桑諾爾布之略伝』²⁶、「喀喇沁親王貢桑諾爾布」²⁷、「辛亥革命時期の回憶」²⁸などの資料によれば、1906年1月にハラチン右旗の「毓正女学堂」の三人の女子学生²⁹が同学堂教師河原操子に連れられて来日した。これは近代日本におけるモンゴル人最初の留学生となる。三人の女子学生に続き、テムゲトら五人（エンヘブリン、テムゲト、イデーチン、アルタンオチル、于恒山）の男子留学生が同年冬に来日した。五人の中で、于恒山は、最初の留学計画になかったようで、ほかの四人を送別する宴会に出席し、そこで祝辞をしたところ、グン王が彼の才能に惹かれ、即時留学させるように決定したという³⁰。五人は、天津から「大信丸」郵船に乗り、神戸経由で東京に辿り着き、振武学堂に入学した。エンヘブリンの後年の回想文によれば「当時ゲンセンノロブ王はこの五人の学生を日本に派遣する際に、清朝政府の許可を受けていなかった。そして、もし学生たちが清朝駐日留学生監督に発見されると、強制帰国させられる恐れがあった。日本の学校側もその点に注意を払い、モンゴル人学生らをベトナムの留学生と一緒にして、できる限り清朝の留学生との交流を避けた。本来ならば、五人の男子学生は振武学堂を卒業後に陸軍士官学校に進学する予定だった。しかし、清朝政府はモンゴル人に対する軍事学習の禁止令を発していたため、五人の中で于恒山は中途退学し、ほかの四人はそれぞれ東京農業大学、千葉医科大学、東京慈恵医科大学に入学³¹した。イデーチン、アルタンオチルは東京農業大学、エンヘブリンは千葉医科大学、テムゲトは東京慈恵医科大学に入学した。

留学中のテムゲトらに関する記録は、日本の陸軍参謀第二部長だった宇都宮太郎氏の日記³²に散見されるほか、具体的な情報はあまり残っていない。彼ら五名の留学は、日本の外務省と陸軍省とが連携して極秘裏に進めたため、行政文書に顕れることは不可能だったと考えられる。横田氏の一連の論文³³で、グン王による近代教育の導入や日本と近代内モンゴルの関係と絡ませながらテムゲトらの留学経緯について実証的な分析を行った。横田（横田：2009）は、彼らの日本留学は、ほかに遅れることなく、「亜細亜の主人公たる資格を全うし、大帝国の基礎を無窮に確立する」ため、まずは「満蒙に日本の実力を扶植するのだ」という、日本があげた「満蒙建国の必然性」という御旗の下に実施された一方策にほかならないと指摘する。

確かに義和団事件のあと、東アジアをめぐる日本とロシアの利害対立が表面化し、両国とも、内モンゴル東部は満洲と隣接していることで、地理的意義に注目しはじめていた。日本は、大陸浪人川島浪速と親交を持つ肅親王を通してグン王に接近し、借款及び訪日などの画策を試み、親日感情を芽生えさせた。さらに、日本はグン王の近代的改革の基礎となる学堂建設にも参与した。また、その学堂における日本人教師による日本式教育の導入は、後日のモンゴル人留学生の誕生にもつながった。

テムゲトらの留学期間は、東京における清末の革命派知識人と改良派知識人による論争が激しかった時期に重なる。彼らは当時の両派の論争にどの程度反応していたかは、資料上確認不可能だが、1911年

²⁵ *Temgetü Mongyol üsüg-ün keb-I egüsgen geigülügsen kömön-ü öberün bey-e-yin temdeglel*（『モンゴル語活字技術を作った人の自伝』、本稿では『自伝と略する』）、蒙文書社、1925年。現在は、内モンゴル社会科学院の図書館に所蔵されている。

²⁶ 刑志祥著：『喀喇沁右旗扎薩克親王貢桑諾爾布之略伝』、康徳5年（1938年）出社未詳 p15。

²⁷ 呉恩和、刑復礼「喀喇沁親王貢桑諾爾布」：『内蒙古近現代王公録續編』（内蒙古文史史料 第三十五輯）中国人民政治協商會議／内蒙古自治区委員會文史資料委員會編、内蒙古文史書店、1989年12月。

²⁸ 呉恩和：「辛亥革命時期の回憶」『赤峰市文史資料選輯 第四輯（喀喇沁專輯）漢文版』、中国人民政治協商會議赤峰市委員會・文史資料研究委員會編、1986年、p77。

²⁹ 于保貞、何恵貞、金淑貞の三人である。1910年に金淑貞はテムゲトと結婚する。

³⁰ 喀喇沁旗誌編纂委員會編：『喀喇沁旗誌』内蒙古人民出版社、1998年11月。

³¹ 『赤峰市文史資料選輯 第四輯』、赤峰市政協文史委員會、1986年、p77。

³² 宇都宮太郎関係史料研究会：『日本とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』（1、2）岩波書店、2007年。モンゴル人留学生の名前が記されるのは明治42年～明治45年。

³³ 横田素子2003：「喀喇沁右旗扎薩克貢桑諾爾布の学堂創設」『アジア民族造形学会誌』（3）27-35。

同2004：「喀喇沁右旗学堂と日本人」社団法人中日文化研究所『中日文化研究所所報』第3号：75-84。

同2005：「内蒙古喀喇沁右旗学堂生徒の日本留学」、『アジア民族造形学会誌』（5）、91-108。

同2009：「1906年におけるモンゴル人学生の日本留学」和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2：156-172。

10月に辛亥革命勃発直後、彼らは宇都宮宅を訪れ、「時局の談を為し、特に蒙古連邦を奨励した」との記述が上記の日記に残っている。彼らの主張する「蒙古連邦」の実態は不詳であるが、前述のエンヘブリンの回想によれば辛亥革命勃発後に彼は「モンゴル民族の独立運動を念に」上海経由で帰郷したことがわかる。一方、テムゲトは、エンヘブリンらと同時に帰っておらず、日本に残って勉強を続けた。テムゲトの帰国は1912年2月である。

辛亥革命以後の内モンゴルには、「大モンゴル国」を目指すボグドハーン政権に参与するか、清朝の存続と「立憲君主政体」を支持するか、それとも清朝を継承した中華民国北京政府の「共和政体」を支持するか、といった多様な選択と行動が見られた。テムゲトらを日本に派遣したグン王は、辛亥革命時には清朝皇帝退位に反対して立憲君主政体を支持し、日本と提携する一方で、ボグドハーン政権とも連絡を取り、ロシアとも接触しながら同時に北京政府とのつながりも絶やすことはなかった³⁴。こうした紆余曲折の模索を試みたが、内モンゴルが独立に至ることはなく、結果的に残された唯一の現実的な道は中華民国の体制に従うことだった³⁵。テムゲトがハラチン右旗に戻る2月頃、グン王はテムゲトより先に帰った留日学生らと共に北京におり、所謂「第一次満蒙独立運動」とされる、日本との接触を試みていた。その試みが失敗に終わると、同年3月にグン王は北京からハラチン右旗に戻り、再び対策を検討し続ける。テムゲトが、グン王の試行模索にどれほど関与したかは不明だが、一人のモンゴル人として自民族の復興のために力を尽くそうと思い、日本で学んだ医学を活かしジョスト盟において医療活動を行った」という。『自伝』によれば、彼は医療活動で盟内を回る内に、モンゴル人大衆の8割以上が自分の祖先の歴史や、文字を理解していないという現実気づき、教育の振興、人材の育成こそが目下の最大の急務であると感じた。彼は「どうしたらモンゴルの人々を開明させ、チンギス・ハーン時代の唯一無二の偉業を再びやり直そうとする精神力を養い、モンゴルを興隆させることができるのか。その最良の方法を探り出したい」と強く決意をする。この様な危機感から、テムゲトは医療道具を捨て、教育文化の道に進むことを決心した。

1914年に、テムゲトは、グン王の紹介で蒙蔵院の秘書長翻訳官及び第二司典礼司員、蒙蔵専門学校教授などを勤めた。蒙蔵院という職場では、彼に内モンゴル各盟旗の公文を読む機会があり、また当時の北京で活躍していたモンゴル人青年たちと交流する中で、モンゴル人を復興させる最良の方法は「教育普及」しかないと感じたようである。ところが、当時の内モンゴルに教育を普及させ、モンゴル語で新しい知識を導入するには、まずはモンゴル語の印刷技術がないという難題に直面した。テムゲトは、あらゆる苦勞をなめつくした結果、1919年にモンゴル語活版技術の開発にも成功し、民国農商部と教育部による「文興奨」のほか、30年免税の特権を得た。モンゴル語活版技術のもとでチベット語活字版にも成功し、テムゲトは「*Mongyol töbed quryuljin bar-i egüsgen baiyuluysan kümün*」(モンゴル・チベット活字版の開発者)と呼ばれた。後に満洲語活字版の開発もまた成功した。資金不足の原因で活字技術が成功して数年経っても、出版事業はなかなか開始できない状態が続いた。やがて、グンセンノロブと、エンヘブリン、アルタンオチルらハラチン右旗出身の旧友から資金援助をうけて成立されたのがMBQである。テムゲトは総裁兼編集者を務めたのが1924年のことである。

2、MBQの構成メンバーと活動目的

『蒙文書社招股簡章』³⁶(以下簡章と略する)によれば、MBQは株式有限会社の性質を持つ非政治的な文化組織であり、呉恩和、李含英、張文、金永昌、張清、汪睿昌、楊時芳、伊徳欽ら8人によって発足された。

『簡章』の中で、株招集の規定を以下の15条から定めた。

³⁴ 中見立夫1983:「グンセンノロブと内モンゴルの命運」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』P431。

³⁵ 中見立夫1983:「グンセンノロブと内モンゴルの命運」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』P431。

³⁶ 『蒙文書社招股簡章』(蒙漢合併)蒙文書社、出版年不明。モンゴル国国立中央図書館所蔵。

- 第一 条：本社组织係招集同志合资有限营业
 第二 条：本社股本定为银币一万元分为一百股每股百元概用记名式
 第三 条：本社股券一致一股
 第四 条：数人合购一股或公司商号及其他团体购有股份者应定一人 为 股 东
 第五 条：认定本社股份者先填写本社认股证书即缴纳股款於北京张旺胡同汪印侯或喀喇沁旗 同 豫 恒
 第六 条：本社股款招集及半即开幕营业
 第七 条：本社收股先给收据俟手续完竣换给股票
 第八 条：股份让渡时须向本社声明登载股东名簿更换股东姓名须纳股票费五角
 第九 条：股东遗失股票得声明补给须纳股票费五角
 第十 条：本社每届年终结算大账一次
 第十 一条：本社营业净利作为十成一成为公積金五成为股东红利一成为发明铜模红利三成为执事酬劳其 分 配 法 另 定 之
 第十二条：股东应得红利结算一月復支給
 第十三条：蒙文铜模权永久归发明汪睿昌
 第十四条：本社经理副经理由股东公举
 第十五条：本章程自行公布日施行

*MBQ*の出版目的は「専らモンゴル語の各種の教科書、人々に有益な歴史書や小説を発行するほか、モンゴル語、チベット語、漢語、英語、フランス語など各言語の書籍などの代理出版を引き受ける」ことであつた。つまり*MBQ*は、各国語の出版を請け負いながら、その主旨はモンゴル語の各種の教科書と人々に有益な歴史書を出版することであつた。

*MBQ*から出版された書籍の販売ルートは、*MBQ*（あるいは漠南景新社）が直接販売するほか、書店を介して販売していた。北京では、雍和宮天王殿に販売支店を置き（『訳注蒙古源流』奥付）、東京では文求堂書店を介して販売していた³⁷。

*MBQ*の発行書籍の部数や種類から見れば、成立初期における出版活動は順調だつたと考えられよう。1928年に国民政府が成立後、テムゲトも南京政府の教育部モンゴル・チベット教育局の常務編集者に任命された。それによって、*MBQ*も南京に移動した。南京に移動してから、*MBQ*は専ら、南京政府の公文書類を出版するようになった。

1934年にテムゲトは、満洲国へ向かい興安軍官学校のモンゴル語の教師となつた。満洲国において*MBQ*の再開を試みるが、失敗に終わり、その後「蒙疆政權」駐満洲国大使になつたエンヘンブリンを通して、*MBQ*の印刷機械を「蒙疆政權」に寄付したという。

資料の制限上、テムゲトの満洲国における活動は不明なところが多い。1939年、彼は満洲国で急死した。死因について彼の息子は、日本人による毒殺と見なしている。満洲国の中で、モンゴル知識人が日本側に疑われることや、暗殺された例も少なからずあつた。「モンゴル文学会」の創始者であるプヘシグも日本人に暗殺されという説がよく知られている。興安軍官学校という満洲国から非常に重要視されていた軍学校でモンゴル語の教師をつとめる場合、母国語の教育と日本側の植民地的な教育の間で摩擦がおきていたことが推測される。特に、1939年はノモンハン事件という特別な時期に当たり、モンゴル知識人への警戒があつたことは容易に想像できる。テムゲトの死後、大阪外国語学校にモンゴル語を教えていたフルンガーが後任に選ばれた³⁸。

³⁷ ウリジ編 *Mongγol kelen-ü qarilčün kelelčikü üges*（『モンゴル語会話編』）の奥付、蒙文書社、昭和5年5月。

³⁸ 内田孝「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）：『内陸アジア市研究』（19）（43-63）。

3、出版物の種類から見るMBQのネットワーク

筆者が確認したところ、当時の内モンゴル知識青年たちによる文化団体や革命党派の機関紙・公文書などはほとんどがMBQから発行されていた。例えば、蒙古留平学生会の機関紙*Mongyol*（『モンゴル』・蒙漢合併）誌、「*Mongyol uysay-a-ban tengkeregülin mandayulqu qural*」（モンゴル民族を興隆させる会—筆者）の宣言書が知識人文化団体の出版物である。また、日本で活躍していた蒙古留日同郷会の代表となるウリジ氏の著作となる『モンゴル語会話編』と『蒙文会話』もMBQから出版された。両作とも日本人向けのモンゴル語教科書である。このウリジ（漢語名施雲卿）は、後述の中華教育改進社第四回年次会でモンゴル教育計画を提案したモンゴル代表の一人である。彼はテムゲトと同じくハラチン右旗出身で、1924年～1941年まで東京外国語学校でモンゴル語の教師として務めた。なお、1929年からは中国語も教えた。東京外国語学校の蒙古語学部の教育に貢献したことが評価され、1937年に彼は、五等瑞宝章を受賞する。著作には上述二種類のほか、1936年に東京で『現代蒙古語』（文求堂）を出版していた。下永憲次編著の『蒙古語教科書』（初級篇）にもモンゴル語で序文を寄せている。一人のモンゴル知識人として彼の活動は、何よりも蒙古留日同郷会機関紙の『ヤジョールタン・ウルス』（*Ijayurtan ulus* モンゴル語）や『漠声』（*Mangq-a-yin qongq-a* 蒙漢併合）など刊行物の編集を担当したことにあった。彼の文化活動については別稿にて検討する予定である。

MBQは、さらに*Nökürülen tusalaqu darumal*（友助刊、出版年不詳）・*Arad-un yurban jorilta-yin tobčiy_a ügülel*（『三民主義浅説』、内蒙古党務指導委員会審定、汪印侯繙譯1929年）を内モンゴル人民革命党の依頼で出版した。また*Mongyul tölügelegči qural-un sonusyaqu medege*（『蒙古代表團報告』、出版年不明）という蒙古代表團駐京弁事處の書物もある。そのほか、『テムゲト伝』によれば、『北京蒙蔵学校学生誌』、『蒙蔵学校』（月刊）、『蒙古週刊』、『蒙蔵週刊』などの定期刊行物もMBQから印刷された。北京蒙蔵学校と特別な関係にあったことが推測される。

これらの出版物から見ればMBQのメンバーは、内モンゴルの王公、革命家、青年学生、文化ナショナリストといったエリートたちと志を同じくして活動を共にしていた人物たちと言える。当時の内モンゴルのエリートたちはMBQを拠り所として社会活動に参加していたのであった。

1920年代の北京におけるモンゴル人の動向を見ると、1925年に内モンゴル人民党が結党されたほか、知識人による文化団体も相次いで結成され、知識人や若者の上流階層が役割を果し始めた頃であった。同時期に北京政府や漢人知識人らの辺境教育に対する「関心」も高まり、「蒙古教育」の議論がなされたことは上でふれた通りである。そうした流れの中でMBQは最初に成立した知識人の文化団体であり、モンゴル語・漢語・チベット語など多言語による出版活動を行い、モンゴル人の教育事業のほか、当時の近代知識人団体の創設や活動の展開、またはナショナリスト・エリートたちの民族運動にとっての情報発信などにも文化的な資源を提供した団体である。

III、MBQメンバーの主張や思考

1、教育主張について

（1）北京政府の「辺境教育」対策における内モンゴルの状況

テムゲトらMBQメンバーの教育主張を分析する前に、当時の北京政府の「辺境教育」政策を概観し、内モンゴルの教育状況を把握する必要があるだろう。

民国元年5月13日、教育総長の蔡元培が、「向参政院宣布政見之演説」の中で、「モンゴル・チベット・回の教育に関しては、現在既に五大民族が一国になったため、五族人民に同等の教育を受けさせるべきだ。満人は漢文漢語に慣れ、特に計画を練る必要がないが、モンゴル・チベット・回の習俗・語文とは（漢人との一筆者）隔たりが多く、特定の教育方法を設け、（漢人と一筆者）統一するべきである」と教育によって民族統合を成し遂げる意を表した。続いて、同年7月に開催された第一次中央教育会議にて

「モンゴル・回・チベットにおける教育案」が討論された³⁹。同案では、モンゴル・回・チベットの状況が（内地と一筆者）異なるため、特別な計画を制定して、国語を統一することから着手し、北京に師範学校を特設して、教師養成の基礎を築くべきであると指摘した。また、宣伝や図書館の巡回によって指導すべきとした。ここで言う国語統合とは、言うまでもなく「漢語」による統合であり、漢語教育の普及による統合を強調している。その後、1920年3月、北京政府教育部は、全国教育連合会決議に基づき、各省区に対し、蒙蔵教育は国語を重視すべきであるという公文を出した⁴⁰。蔡元培からは、国語統一実施方法について、民族の言語を主として、内地の言語は補助として教授するという考え方が出された。具体的には、普通学校の国語科は、初等小学校の場合四分の一を国語、高等小学校は三分の一を国語、中学校は二分の一を国語とする提案をしている⁴¹。教科書編纂に関しては、1916年の全国教育行政会議で可決された『蒙民教育暫行弁法案』で次のように指摘している。「普通教科（既存の普通教科書一筆者）はモンゴルに適用しない、特別に編制しなければ実効が得られない。教育部から該区域の長官を通して、該区域の状況を良く知る人員を派遣し、日常生活及び過去の歴史・自然現象を調査し、分類製本し、編纂基準に従い、普通教育の重要な材料を参考にしながら教科の原案を制定し、教育部に送り審査を受ける。教育部の定めた教育主旨に反していなければ、直ちに該区小学校に採用させる」⁴²。このように、民国初期からモンゴル・チベット・回など辺疆地域に、国語（漢語一筆者）統合に基づく所謂「国民教育」の政策・方針が規定された。それらを実行するため、1923年に、中央教育部に蒙蔵教育委員会が設けられた。

一方、中央政府以外の蒙回教育共進会、中華教育改進社など、漢人知識人を中心とする民間教育団体の中でも辺境教育に対する「関心」が高まっていた。その中で、蒙回教育共進会の主旨は「蒙回教育を普及させて辺疆を開化させる（普及蒙回教育開通辺疆）」ことであり、その簡章には8章20条の規則が定められた。各章は「名称及び宗旨」「会務」「組織」「職権」「経費」「会地」「附則」など8項目がある⁴³。そのうちの「会務」には五条の内容があった：①蒙回の学齡児童を調査し、学校教育の建設を準備する（調査蒙回学齡児童、籌備学校教育之建設）②蒙回の生計状況を調査し、職業教育を準備する（調査蒙回生計状況、籌備職業教育）③蒙回の文字による書籍・新聞を編集翻訳し、普通知識を増進させる（編訳蒙回文字書報、増進其普通知識）④蒙回子弟の遊学と五族互助の精神を提唱する（提唱蒙回子弟遊学及五族互助之精神）⑤蒙回の腐敗した旧習を改良し、固有の特色を保存する（改良蒙回腐敗旧習、爾保存固有之特色）。以上は、蒙回教育共進会の具体的な規則であるが、当時の（内）モンゴル地域においてどこまで実行されたかは、現段階では明らかになっていない。

他方、中華教育改進社も1924年からモンゴル教育委員会を設置し、モンゴル人代表を招き、年次会において「蒙古教育」について討論を行うようになった。まず、同年7月に開かれた第三回年次会第一回学術会議における陶行知の報告では、モンゴルの教育方針を協議している。同問題を先に提案したのは馬鶴天で、彼の三つの方針（①元々の優れたものを保持し、個性を発展させる②平民教育を重視し、共和精神を発揮する③現在の生活を改良し、社会進展の需要に適應させる）にさらに陶が修正を加えた。陶は「わが国の五族共和は事実合っているだろうか。どのようにして五色旗を五族の真の代表にさせるのか。中華民国成立、五族が『それぞれが自分のことをやっている（各幹各幹的）』状態である。現在、もし連合互助を望むなら、何よりも先に教育を振興させ、共同概念を育成すべきである。モンゴル語の『中華民国』の『民』と言う語（モンゴル語で『*irgen*』一筆者）は、漢人の意味を表す。その意味からモンゴルが自らを五族の枠外にいると理解していることが分かるだろう。教育によって培養される

³⁹ 劉英傑主編：『中国教育大事典（1840-1949）』浙江教育出版社、1993年、p847。

⁴⁰ 劉英傑主編：『中国教育大事典（1840-1949）』浙江教育出版社、1993年、p847。

⁴¹ 劉国彬2009：「蒙蔵教育における言語問題—中華民国成立から日中戦争前夜まで—」『中国四国教育学会 教育学研究紀要（CD-ROM版）』第55巻 P380。

⁴² 劉英傑主編：『中国教育大事典（1840-1949）』浙江教育出版社、1993年、p878。

⁴³ 『新教育』中華教育改進社出版、第六卷第二期 民国十二年二月 蒙回教育共進会成立p251～p258。

五族共同概念は相互の概念である。今日互いに理解不足で、誤解や軽蔑が起きやすい。これらを教育の方法で無くし、互いに理解し合い尊敬し合うべきであり、そうすれば五族の絆が強まる。そのため、モンゴルに対する教育をおろそかにしてはならぬ」と指摘した。そして、モンゴル教育方針について以下の四つの内容を定めた：①五族公民資格を養成する②蒙賢（モンゴルのエリート—筆者）を養成し蒙古を治める③モンゴル民族の独自性を保持させ、優れた点を更に発展させる。④現在の生活状況に従い、適切な社会進化の需要を模索する。陶の報告内容を同会議の分会におけるモンゴル教育組の報告や年会決議案と総合して見ると、表面上はモンゴル人のためのモンゴル教育を鼓吹しているが、その最終的な目的はモンゴル人に漢人と共同の国家概念を持たせるためである。しかも、会議におけるモンゴル教育をめぐる提議・計画・方針などはすべてが陶らの漢人知識人によって一方的に提出されたもので、一貫して五族共和枠内でのモンゴル人、言い換えれば中華民国国民としてのモンゴル人の教育を提唱している。モンゴルの代表として参加した郭道甫ことメルセが、方針の第三条の民族の独自性に「言語・文字」を加えるよう要求したのみで、モンゴル人の声はほとんど届いていなかった。

続いて1925年8月の太原における第四回年次会では、モンゴル教育に関する8つの案が可決され、上述の方針が再度確認された。そのほか、モンゴルの代表等によるモンゴル教育計画案が提議された。会議ではモンゴル代表の王普霖が挨拶の言葉をモンゴル語で述べた⁴⁴。計画提議者の代表は巴図（エンヘバト）、伊徳欽（イデーチン）、呉恩和（エンヘプリン）、巴雅爾（サインバヤル）、王徳呢嘛（ワンダンニマー）、李風岡（モンゴル語の名前不明）、林琴（リンチン）、博彦格樂爾（ボヤングレル）、烏樂爾（ウリジ）、金永昌（アルタンオチル）らである。その中で伊徳欽、呉恩和、金永昌の三人について既に上述したが、そのほかのメンバーの多くは、後に内モンゴル人民党の結党に関わっていく。烏樂爾（ウリジ）は、前述したとおり蒙古留日同郷会の代表となった。彼らの提出した教育計画の内容をまとめると次のようになる。①政府がモンゴル教育機関を設けること、②政府がモンゴル人の遊学や王公ラマ層の建学を奨励すべき、③各旗署の官吏は必ず相当の学識を身に付けるよう要求する、④各盟旗に小中学校を設置すること、⑤蒙蔵専門学校を蒙蔵大学に変えること、⑥政府が教育費用を負担することなど、モンゴル人代表は、（漢人知識人らの）五族共和を強調するスローガンに左右されながらもかなり具体的な教育計画案を政府に要求していた。

（2）内モンゴル知識人の教育主張

清末から始まったモンゴル人の新しい進路模索の中で、「教育の振興」という主張を、内モンゴルの有識者たちは「民族復興」のプロセスの中で具体化しようとした。そうした動きの中で、グン王の「三学堂」が最も代表的であり、多くの知識人が輩出されたことはよく知られている。民国成立後、蒙蔵院総裁に任じられたグンセンノロブは早い段階から蒙蔵教育事業に取り組んでいたことは上述のとおりである。

一方、1910年代には、まだ自らの言論の場を持っていなかった内モンゴル知識人層は主に *Möngyol-un sonin bičig*（『蒙文新聞』） *Mögden-ü Mongyol sedgül*（『奉天蒙文報』）といった外国人によって発行された出版メディアを利用し、自分自身の主張を発信していた。ちなみに *Möngyol-un sonin bičig* の論調については、先述のボルジギン・ブレン氏の先行研究があるため、ここでは *Mögden-ü Mongyol sedgül* に掲載されたモンゴル人によって書かれた教育関係の文章を幾つか引用してみたい。

まず、「現在のモンゴル」⁴⁵という文章では、次のように述べられている。「現在の我がモンゴルはまるで長期間重い病気を患った死にかけの患者のようである・・・我がモンゴルの病気を治療できる方法は現在の学校教育しかない」と学校教育はモンゴルの唯一の進路であると指摘している。次に、「教育を普及させることは今日我々が直面している急務」⁴⁶という文書では、「現在、国家の盛衰を論じる人々は皆、

⁴⁴ 『新教育』 p159。

⁴⁵ 作者未詳：「*Edüge-yin mongyol*」 *Mögden-ü mongyol sedgül*（『奉天蒙文報』）第67号第一面 民国八年十一月十五日。

⁴⁶ Sengge著：「*suryan kümüjigülkü-yi neyiteber tur kürügülkü anu ene edürün yayaraltai učir*」 *Mögden-ü mongyol sedgül*（『奉天

教育を根本的な原因としてとらえている。そのため、教育を受けた人の割合の数字で、その国の発展レベルが理解できる。米英仏日独などの国民で教育を受けた割合は80～90%に達し、優れた発展を遂げている。上の五カ国に比べるとロシア、スペイン、トルコの国民の教育を受けた割合は非常に低い。そしてこの三国の発展レベルも低いことが分かる。中国では教育を受けた人の割合は3～4%しかいない。従って、中国は発展と言える状況にはない。教育とは、実に国家の盛衰の基礎である。我がモンゴルの状況を見ると、教育を受けた人は一万人のうち二、三人しかいない。これはほとんどゼロに近い。このような状態で、現在の競争の中でいかに生存できるのか。我が部族の権力者（王公—筆者）たちはこうした状況をはっきり知っているはずである。ただ、彼らには幾つかの心配があるのだ。つまり、一時に教育を普及させ、モンゴルの大衆の知恵が開明化しても、彼ら自身の利益にならぬという心配である。このような心配は大間違いである」。ここでも同じく教育の重要性が語られている。さらに世界中の国々の状況を具体的に分析して、モンゴル人の運命を世界的な視野から考え、教育の進路を王公に要求している。

また、「ブリヤード・モンゴル人の独立と内モンゴルとの関係」⁴⁷という文書では、「我がモンゴルの人々よ、早く覚醒しよう。我々の兄弟であるブリヤード・モンゴルは独立した。彼らはロシアの支配下に200年も置かれたが、固有の文化、つまり、言語・文字や仏教を今までに保ってきた。これは彼らが独立を果せた原因である。内モンゴルの人々も速く教育の道を歩み、知恵を開明化させよ」と呼びかけている。そのほか、「20世紀のモンゴル」⁴⁸、「モンゴルの盛衰は各ジャサグの王公に関連する」⁴⁹など多くの記事が掲載されたが、いずれもモンゴルの復興方法を教育に求めていたと理解できよう。

要するに、1910年代における内モンゴル知識人は、現実への認識や未来への思案の中で教育の重要性を何よりも強調していた。その主旨は、民国の鼓吹する五族共和枠内におけるモンゴル人の教育ではなく、内モンゴルを越えた全モンゴル種族の復興を目指したものと考えられる。教育内容にしても、「国語統一」を宣伝する北京政府の教育政策と対照的に自民族（モンゴル）の習俗・文字・言語を守ることがその民族の生き残る重要な手段だと認識していたのである。

（3）テムゲトの主張するモンゴル教育

以下、*Mongγol üsüg-ün čayan toluyai* 『モンゴル文字の綴り方』1921年）と *Mongγol udq-q-yin suryaqu bičig*（『蒙文教科書』1923年）の内容分析を通して、テムゲト及び1920年代における内モンゴル知識人の教育主張について検討してみたい。

A：『モンゴル文字の綴り方』（*Mongγol üsüg-ün čayan toluyai*）

テムゲトの『モンゴル文字の綴り方』は、専らモンゴルの初等小学校の初期クラスの教科書として執筆された。前書きの内容からテムゲトが同教科書に寄せた意図を次の三点にまとめることができる

第一に、モンゴル文字の歴史について振り返り、モンゴル文字の由来、構造変化、文字の綴り方を説明する。第二に、モンゴル文字の綴り方をよく覚え、初学者はその文字（モンゴル文—筆者）を読んで、自分の根源を知り、（モンゴル人の一筆者）本来の文字を覚え、使えるようになる。第三に、この教科書を通して、モンゴル文字を借りて創られた満洲文字をモンゴル文字と間違えて、テムゲトの編訳したモンゴル語の書籍をおかしな文字だと批判する人に証拠を提供し、是非を問うことである。

以上の三点の内容から、①テムゲトが、モンゴル語の教科書を編纂した目的はモンゴル人に民族の本来の文字を読ませ、そこから自分自身の根源を知らせるためであった。ここで言う根源とは、自分はど

蒙文報』第42号 第一面 民国八年五月二十四日。

⁴⁷ Teneg: 『Boriyad Mongγol-un öbertegen egerkeju ulus bolqu anu mongγol ayimay luy-a-yin qolbuydal』 *Mögden-ü mongγol sedgül*（『奉天蒙文報』）第33号 第一面 民国八年3月25日。

⁴⁸ 著者不明: 『Qoriduyar müčelge-yin mongγol ayimay』 *Mögden-ü mongγol sedgül*（『奉天蒙文報』）第22号 第一面 民国八年1月11日。

⁴⁹ 著者不明: 『Mongγol-un manduju bayuraqu anu olan jasay vang güng-üd tur bui uçir-a』 *Mögden-ü mongγol sedgül*（『奉天蒙文報』）第18号 第一面 民国七年11月7日。

こから来たか、自分は誰かという問いであり、それに答えてくれるのが（モンゴル）文字であるとしている。モンゴル人のアイデンティティをモンゴル文字に求めているのである。②当時のモンゴル人の中では、母語のモンゴル文字を知らず、モンゴル文字から作られた満洲文字をモンゴル文字と思い込んでいる人たちもいたことが分かる。しかも、そうした人たちは、テムゲトのモンゴル文字で書いた書籍をおかしな文字で書いたと批判するほどであった。言い換えれば、当時のモンゴル文化は、漢化だけではなく、満洲化の影響も少なからぬ残っていたことが推測されるし、モンゴル人の教育レベルが聞危惧推測されていたのである。

注目すべきは、同教科書は、基本文字の書き方、文字と文字の綴り方を詳しく説明しており、当時の北京政府側の五族共和論に基づく「辺疆教育」政策の痕跡が見られないことである。総じて見れば、テムゲトは上で述べたように教科書の出版やモンゴル人に対するモンゴル語の教育をモンゴル人の根源を見つけ出す道だと理解していたと言えよう。

B：『蒙文教科書』（*Mongyol udy-a-yin suryahu bičig*）

『蒙文教科書』は、テムゲトとイデーチンが『共和国教科書新国文』を基に編訳した蒙漢合併の教科書である。1923年に漠南景新社から発行された蒙漢併合の8冊である。母体となった『共和国教科書新国文』は、中華民国成立後商務印書館によって企画・刊行された『共和国教科書』シリーズの国文教科書の一つである⁵⁰。1912年上海商務印書館から発行された。8冊で、冊ごと50課から構成される。商務印書館から発行したほかの国文教科書と同様に、同教科書の「編輯大意」で、最初に挙げているのが「本国の要政及び政界の大勢について詳述し、共和国民の思想を養成する」ことである。内容としては、最初の三冊は主に単語から短い文章を扱っており、国文の入門的な内容となっている。第四冊以降は、内容が豊富で、自然・社会・動物・植物・食べ物・政治・地理・歴史など多様である。なかでも、「我国」（4冊1課）、「大統領」（4冊2課）、「敬国旗」（4冊50課）、「我国革命」（5冊31課）、「民族」（6冊29課）、「共和国」（7冊3課）、「我国疆域」（7冊43課）、「清季外交之失敗」（一、二、三）（7冊45～47課）、「愛国」（8冊13課）、「国慶日」（8冊14課など）共和国民の思想教育への配慮が目立つ。

では、『共和国教科書新国文』を母体にして編訳された『蒙文教科書』の内容を見てみよう。8冊の中で、第一冊の本文の前にモンゴル文字史について中国語で書いてあるが、内容は上の *Mongyol üsüg-ün čayan toluyai* のそれと大体一致している。本文では、基本的な文字の書き方や綴り方を説明している。第二冊には54課があり、人間、植物、動物、食べ物などを紹介した短い文（「学生が毎日学校に行く」など）からなる。表紙内には、グン王の写真と紹介がある。

第三冊以後は、ほぼ『共和国教科書新国文』の内容と一致する。だが、『蒙文教科書』は『共和国教科書新国文』のモンゴル語版と理解してはいけない。表紙のデザイン絵とモンゴルハーンや王公の肖像（写真2—5）の掲載、序文のほか、第8冊の最後にある「演説稿」の内容が『共和国教科書新国文』のそれと異なり、モンゴル人学生に向かって送った言葉になっている。こうした工夫からテムゲトらのモンゴル教育に対する主張が読み取れる。

まず、第一冊の表紙にはモンゴル帝国時代の軍事・社会形態を表すクリレーの絵が描かれている（写真1）。表紙内にフビライハーンの像（写真2）があり、その下に、フビライハーンがパスパ文字を作らせたことについて紹介している。グン王による序文では、この教科書を編纂したことについて以下のよう述べている：「最近（1923年頃—筆者）、書店では、たまにモンゴル語の書物が見られるが、教科書として使えるものはあまりない。従って、モンゴル語を勉強したい人、特に、初学者は非常に困っている。我が旗の汪睿昌とイデーチンらは日本に留学しており、文字教育は新学の原理に従わない限り、時代の流れに適応できないと悟り、この教科書を作った」。テムゲトらは、モンゴル人に新しい知識を教授するためにこの教科書を編纂したと理解できる。

⁵⁰ 並木頼寿：「清末民国期国文・国語教科書の構造について」（『中国研究月報』第64巻第2号、(2010、2) p37



写真1



写真2



写真3



写真4

それから、第八冊の最後にある附録「演説稿」を比較してみよう。

『共和国教科書新国文』の「演説稿」(写真5、6)は国民学校を卒業する生徒らに対して、「勤」(勤勉)と「儉」(儉約)の二文字を取り上げ、人間の道徳について言及し、さらに、学問を身に付け、一国国民としての任務を満すことを願っている。

一方、『蒙文教科書』に附録された「演説稿」(写真7、8)は、まず、卒業する生徒に祝辞の言葉を送る。次に、生徒らに抱くべき使命感について語っている。栄光に満ちた偉大な歴史を持つモンゴル民族が、世に遅れた弱小民族に変わった原因は教育を軽視したことにあると指摘した。そしてモンゴル民族の「復興」の方法を、新式教育に求め、若い学生たちにその期待を寄せた。

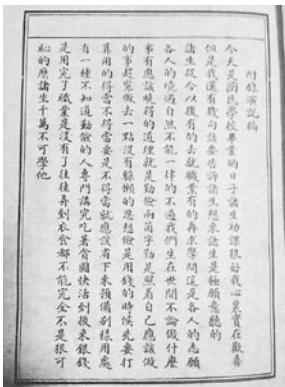


写真5

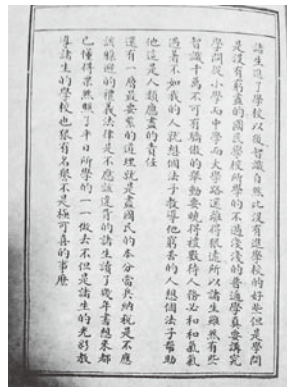


写真6

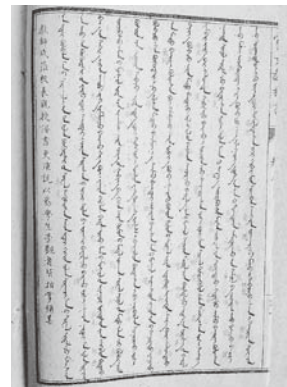


写真7

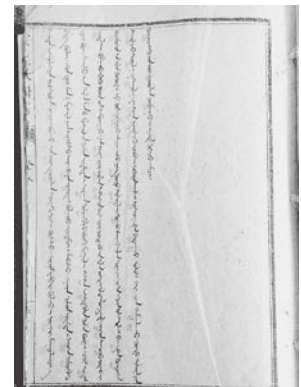


写真8

上で紹介したように、『蒙民教育暫行弁法案』では、モンゴル語の教科書は教育部の審査を受け、その教育方針に反しないものだけが、出版されるとしており、テムゲトらの編纂した『蒙文教科書』も教育部の審査を受けたに違いない。テムゲトは、中華民国の政体や五族共和に関する内容を原文に従って翻訳したが、ほかのところで、モンゴル民族の教育に対する彼の思いを発していると思われる。テムゲトらの『蒙文教科書』は、単に言葉を教える手段ではなく、民族意識を養う手段であるとの点にも主眼があったと言えよう。

2、歴史観について

MBQから出版されたモンゴル歴史関係の書籍には、栄光に満ちた13世紀のモンゴル人の歴史が多くの割合を占める。Činggis qayan-u čedig (『チンギス・ハーン伝』)、Činggis qayan-u durasyal-un tegübüri (『チンギス・ハーン訓言』)、Yeke yuvan uols-un manduysan türü-yin köke sudur (『元史演義』)、『訳注蒙古源流』などが挙げられる。これらの書籍はすべてチンギス・ハーン一族の「黄金家族」を主題とした歴史書あ

るいは歴史小説である。テムゲトが、チンギス・ハーン時代のモンゴル史に焦点を当てたことは、「チンギス・ハーン」という御旗の下、モンゴル人の歴史意識を覚醒させ、モンゴル人の主体性を主張したものだと考えられる。

ここで再び中華民国の役職を兼務するテムゲトの歴史観の由来について注目したい。モンゴル人の歴史観は代々その年代記によって伝承された。草原の文人たちの精神世界を描いた楊海英氏の著作では、モンゴル人の歴史観について以下のように語っている。「北アジアに住むモンゴル人は、その隣人の漢族とは異なった歴史観を持っている。その歴史観を知るためには、モンゴル語で書かれた年代記を分析しなければならない」⁵¹。17世紀以降、モンゴル社会には数多くの年代記が誕生した。最も代表的なものは次の四つである⁵²。まず、著者不明の*Altan tobči*⁵³である。2番目は*Erdeni-yin tobči*⁵⁴である。3番目は著者不明の*sir-a tuyuji*⁵⁵で、4番目が*Lobsangdanjin*の*Altan tobči*⁵⁶である。これら四部の年代記をはじめモンゴル歴史書の共通の特徴としては、チンギス・ハーンの「黄金家族」をインドの古代帝王にまで遡って書いている。つまり、チンギス・ハーンの「黄金家族」はブッダの後裔であるというロジックである⁵⁷。このように「黄金家族」が仏教と重なり合った二重の構造には年代記の著者たちによる強い自己意識がもりこまれている。そうした自己意識を受け入れた近代知識人たちはそれまで写本や口頭で伝承してきた年代記を活字化して、彼らの歴史観を示した。テムゲトもそのような一人である。

テムゲトは、上述した歴史書の中から、一番目の著者不明『アルタン・トブチ』を漢語版に基づいて*Činggis qayan-u čadig*（『チンギス・ハーン伝』1925年）と*Boyda Činggis qayan-u čedig*（『聖チンギス・ハーン伝』1927年）というタイトルで二回にわたってモンゴル語に訳した。*MBQ*発行の『訳注蒙古源流』は二番目の*Erdeni-yin tobči*であるが、テムゲトは漢語版の『蒙古源流』をもとに『訳注蒙古源流』を出版した。3番目と4番目は*MBQ*から出版されていない。1930年代に両方ともモンゴル文学会という別の知識人文化団体からも出版されている。

そのほか、『元史演義』（*Dai yuvan ulus-un teüke*全4冊、12章）は、19世紀の著名な文人インジャンナシ（1837～1896）の書いた歴史小説の一部を印刷したものである。テムゲトは、その著作のタイトルと、作品の由来について触れていない。実は、この小説の元来のタイトルは*Yeke yuvan ulus-un manduysan türü-yin köke sudur*（大元帝国興隆の青い年代記）という。チンギス・ハーンの物語を中国小説の形式を使って描写したものである。全部で120章とされるが、今日では69章しか発見されていない。『大元帝国興隆の青い年代記』は、歴史小説ではあるが、それは明らかに民族の歴史を忘れたモンゴル人に対する啓蒙

⁵¹ 楊海英著：『モンゴル草原の文人たち 手写本が語る民族誌』平凡社、2005年p74。

⁵² 17世紀の四つの歴史書に関する情報はBolat著：*Arban doloduyaw jayun-u mongyol teüken uran jokiyal*（『17世紀におけるモンゴル歴史文学』、内モンゴル大学出版社、1995年）、森川哲雄『モンゴル年代記』（白帝社2007年）烏云卒力格著：「歴史と民族の創生：17世紀モンゴル編年史における民族的アイデンティティの形成」（博士学位論文、一橋大学、2009年6月10日）、シドルグ著：『世紀17蒙古族編年史与蒙古文文史档案研究』（内蒙古大学出版社、2009年、6月）などを参考したものである。

⁵³ 著者不明：*Altan tobči*（『アルタン・トブチ』）、フルタイトルは、『*Mongyol-un qad-un ündüsün quriyangyui altan tobči*』（『モンゴルのハンたちの根源を簡略にまとめあげた黄金の概要』）である。日本では小林高四郎が『蒙古黄金史』というタイトルで日本語に訳したものがあ。『アルタン・トブチ』と呼ばれる年代記はこの他にもロブサンダンジン（『アルタン・トブチ』、メルゲンゲゲンの『アルタン・トブチ』があるため、これは著者不明の『アルタン・トブチ』と呼ばれている。

⁵⁴ Sayang seçen著：*Erdeni-yin tobči*（『エルデニ・トブチ』＝『蒙古源流』）フルタイトルは、『*Qad-un ündüsü-nü erdeni-yintobči*』（『ハンらの根源の宝石の概要』）である。1662年に書かれたと言われる。これは清朝乾隆帝時代に漢語に翻訳されたという。漢語のタイトルは『蒙古源流』となる。

⁵⁵ 著者不明：*Sir-a tuyuji*（『シャ・トージ』）、フルタイトルは*Erten-ü mongyol-un ündüsün-ü sir-a tuyuji orosibai*（『古のモンゴルのハンらの根源の大黄金史』）である。

⁵⁶ Lobsangdanjin著：*Altan tobči*（『アルタン・トブチ』）フルタイトルは、『*Mongyol-un qad-un ündüsüilegsen törö yoson-ujokiyal-i tobčilan quriyaysan altan tobči kemekü orosibai*』（『古のハンたちの根源とする政治の由の著作を簡略に集めた黄金の概要』）である。これの著者不明の*Altan tobči*と区別するために研究者に*Lobsangdanjin*の*Altan tobči*あるいは*Lo・Altan tobči*ともいう。

⁵⁷ 烏云卒力格著：「歴史と民族の創生：17世紀モンゴル編年史における民族的アイデンティティの形成」（博士学位論文、一橋大学、2009年6月10日）p3

の書であった。インジャンナシは、『大元帝国興隆の青い年代記』のほかにも「根源を忘れてはいけない」など多数の小説を著し、言語と歴史を部族の根源として主張した。彼は、母語のモンゴル語とモンゴルの歴史を勉強せず、ただ唐宋の詩に熱心であるモンゴル貴族を強く批判し、根源を忘れたものは「深淵の猿」に過ぎないと諷刺している。

その後、同小説は1930年代にモンゴル文学会のブヘヘシグによって12冊、東蒙書局のヘシングによって、9冊(43章～72章)、それぞれ出版されている。また、1940年代に満洲国内に発行されたモンゴル語の新聞『青旗』紙にも同小説の一部が連載された⁵⁸。このように、近代内モンゴルにおいて、この *Yeke yuvan ulus-un manduysan türü-yin köke sudur* は、モンゴル人社会内でかつてないほど愛読されたという。その人気について、当時の内モンゴルの各地を調査したドイツのハイシッヒ氏は「どこかの牧民の天幕の中でも、すでに定住化したモンゴル人の粘土小舎の中でも、或は真冬、とあるラマ廟の宿の中でも、この本が、我を忘れて読みふけったり、一団の聞き手の前にそれを朗読するモンゴル人の手に握られていたのをたびたび見かけたものだった⁵⁹」と書き残している。その人気ぶりは、今日のモンゴル人の中でも衰えることがなく、内モンゴルでは1957年から2007年まで再版を繰り返し、モンゴル国でもキリル文字版が出版されている。インジャンナシの作品ほど、モンゴル人のかつての光栄の確認と、同時に自己確認への願望を満足させるものはほかになかったとされている⁶⁰。

歴史書のほか、1920年代以後にチンギス・ハーンを主題とする各ジャンルの文学作品も数多く発表された。「英雄のテムジン」(戯曲)、「チンギス・ハーン賛歌」(詩歌)、「チンギスの後裔」(詩歌)、「聖主チンギス・ハーンの故郷」(詩歌)、「聖主チンギス・ハーンの墓」(散文)、「チンギス・ハーン」(散文)、「英雄たるテムジン」(散文)、(テムジンとはチンギス・ハーンの名前である一筆者)など各ジャンルの文学作品⁶¹では、「チンギス・ハーン」の偉業を謳い、彼の後裔である近代のモンゴル人に祖先の記憶を想起させた。

以上にあげた歴史書であり、文学作品であり、近代知識人にとって、そこに描かれた「チンギス・ハーン」は、ただの歴史人物像ではなく、モンゴルというアイデンティティの依拠する「文化資源」でもあった。その意味で、テムゲトらの歴史認識は、民国側の打ち出した五族共和論と相容れないものであった。

IV、MBQと同時期の漢人知識人との関係

1923年7月、中華教育改進社が主催した全国教育展覧会が南京で行われた。内モンゴルの知識人側からMBQ総経理の汪印侯ことテムゲトが参加し、蒙古生活展覧に15件の展示品を出品している。この展覧会は中華教育改進社の第三回年次会と同時に開始され、ほぼ三ヶ月続いた。

中華教育改進社の機関紙『新教育』(第九巻第5期)に残った張繩祖の「蒙古教育組報告」によれば、この展示会でモンゴル生活や教育に関する展示品は101件だった。それは籌辺協会(74件)、中華教育改進会(12件)、汪印侯(15件)が出品したものである。展示品の種類としては、飲食類7件、用具類4件、衣類装飾類3件、児童玩具2件、画図類4件、写真類13類、宗教類32件、書籍類36種という。その中で書籍類には(A)紀要及び史略10種、(B)調査遊記7種、(C)蒙文書籍13種、(D)日本書籍1種、(E)露国書籍1種(F)その他4種となる。次に、表1の内容から書籍の詳細を見よう。

⁵⁸ 『*Köke tuy*』(フフ・トグ/青旗)、モンゴル語の新聞。1941年1月、満洲国の新京において設立されたモンゴル語出版社フフ・トグ社から発行されていた。全部で178号まで発行された。*Yeke yuvan ulus-un manduysan türü-yin köke sudur* は、第24号に初めて掲載され、その後は断続的に170号まで確認される。

⁵⁹ W・ハイシッヒ著、田中克彦訳、『モンゴルの歴史と文化』1967 p41-42。

⁶⁰ W・ハイシッヒ著、田中克彦訳、『モンゴルの歴史と文化』p42。

⁶¹ Čečenbiligtü著:『*Bayatur köbegön temüjin*』*todayadu mongyol-un arad-un sedgülKesingge*著:『*Činggis-ün maytayal*』*sayičungy-a* 著:『*Činggis-ün üres*』*Jinliyang* 著:『*Boγda Činggis qayan-u ülügei anu*』*Rulyarjab* 著:『*Boγda Činggis qayan-uongyun*』*Rulyarjab* 著:『*Činggis qayan*』*Qada* 著:『*Temüjin*』。

表1

種類	書籍及び出品者
紀要及び史略	内蒙古紀要、蒙古史、東蒙牧畜、滿蒙皮革工業、綏区婚葬礼俗記、蒙古及び蒙古人、自治外蒙古、外蒙古近世史、(以上壽辺協会出品) 蒙古鑑、新蒙古(以上中華教育改進会出品)
調査遊記	察区牧畜調査記、烏蒙調査記、河套調査記、外蒙古西部遊歴談、外蒙古農業調査記、外蒙古鉱物調査記(以上壽辺協会出品) 後套実業調査記(以上中華教育改進会出品)
蒙文書籍	蒙文字母、蒙蔵漢合璧三字経、蒙漢千字文、蒙漢大学、蒙漢中庸、蔵漢合璧孟子、漢蒙国文教科書、蒙漢合璧漢語入門、蒙文鉛字、蒙文鉛字説明書、蒙文雑学(以上壽辺協会出品) 蒙文五方原音(汪印侯出品) 蒙文教科書(中華教育改進会出品)
日本書籍	日文蒙古軍記(汪印侯出品)
露国書籍	露国蒙文鉛字雑誌(壽辺協会出品)
その他	蔵書目録(壽辺協会出品)、西北半月刊、後套実蒙古計画書、蒙蔵院統計(以上中華教育改進会出品)

出典『新教育』第九巻第5期 民国十三年十二月p93張繩祖報告により筆者作成。

上の表から見れば、展示された書籍には、(内外) モンゴルの歴史・調査報告、旅行記、新聞雑誌、教科書などモンゴル語、中国語、日本語の各種類のものがみられた。MBQの総経理汪印侯ことテムゲトが展示したのは『蒙文五方原音』、『日文蒙古軍記』二種類である。前者の『蒙文五方原音』は、ハラチン右旗出身のハイサンが編訳の『蒙漢合併五方元音』(*Tabun jög-ün aquu ayalyu bičig*) だと考えられる。後者は日本語で書かれたモンゴル軍に関する記録だと推測できるが、作者や出版社について書かれていないため、詳細は不明である。この二種類のほか、壽辺協会出品の『蒙文鉛字』、『蒙文鉛字説明書』は、テムゲトがモンゴル語活版技術を開発した際に書いたもので、両者ともMBQから出版された。

また、『蒙文字母』というモンゴル語の書籍は、テムゲトの書いた、上の *Mongyol üsüg-ün čayan tolujai* だと思われる。タイトルを意識すれば『モンゴル文字の綴り方』になるが、テムゲトは漢語で『蒙文字母挫音法』と訳した。それを張繩祖が『蒙文字母』と簡略したと考えられる。それから中華教育改進会出品となっている『蒙文教科書』も、上で述べたテムゲトとイデーチンが編集したものだと考えられる。

張繩祖報告の後半の内容⁶²から、今回の展覧会におけるモンゴル教育の位置づけ及び展覧会の主催者である漢人知識人の考える辺境教育について、さらに把握することができる。張氏、あるいは漢人知識人側にとって、蒙古教育への「関心」は二つの意義があると考えられる。

第一に、蒙古教育は五族共和の達成・共同国家概念(或は国民性)を養成する手法として取られている。その五族共和や共同国家概念というのは、漢人文化の影響を「モンゴル地域」に広めることが最終の目的であったことは、明白である。それから、報告における「モンゴル地域の教育の幼稚さは、言うまでもない(蒙地教育之幼稚、自不待言)」や「そもそもモンゴルの教育は、手がかりが分からぬ(夫蒙

⁶²『新教育』第九巻第5期(民国十三年十二月)に掲載された張繩祖報告によれば、報告の後半では、まず「蒙地」教育の「幼稚」で未熟な現状をまとめた。だが、報告では、蒙地(内蒙古・熱河・察哈爾・綏遠)における学校の個数を統計したのみで、「幼稚」な現状の具体性が不詳である。次に、五族共和と辺疆教育の関係を強調した。具体的に①中国(中華民国一筆者)が本当に五族共和の目的に達したいとすれば、各民族を融合させ共同の国民性を養うべきである。この意味で辺疆教育の重要性は簡単に分かるだろうと指摘した。つまり、各民族(漢族以外の民族)を漢族に同化させ、漢族と同様の国民性を養成する手段として、教育の役割は重要であると主張した。②(各民族の一つである一筆者)「蒙古」の教育は頭が痛いほど遅れている。内地(原文では中土)と異なる蒙古教育における最も重要な課題として以下の六点を挙げた。「モンゴル言語文字を如何に漢字と同化させるかがその一である；教育の中でラマ教にどんな態度を取るかはその二である；如何にモンゴル学生が内地へ入って求学することを奨励するかはその三である；遊牧社会の教育行政を如何に措置するかはその四である；学校が如何にモンゴル社会と適するかはその五である；教科書の編纂・教材の選択・教師の養成を如何にモンゴルの需要と適合させるかはその六である」と。③蒙古教育に「関心」を持つことは、国防に関わる重要な問題であると強調した。なぜならば、蒙古地区に当たる辺疆は、長年日露に狙われた地域で、本教育組に出品した日露書籍にも、各種の旅行記が掲載され、野心満々であるからである。というのが張氏の考えである。④我が国民(漢人一筆者)及び国事に関心がある人が留意すべき辺地教育はモンゴルだけではなくと張氏が最後に加えた。

古教育、頭緒紛繁)」などの描写から漢人知識人のモンゴルに対する文化的な優越感が感じられる。

第二に、張らにとっては、「モンゴル地域」或は辺疆とされる地域の教育へ関心を持った最大の理由は、モンゴルを民国の国境地帯の防衛圏にすることであった。しかも、「内地」に比べて、言語や文化など様々な隔たりが存在するモンゴル人、特に知識人層を動員するには、彼らの最も心にかけている「教育復興」理念を利用する必要があっただろう。張氏があげたモンゴル教育における6点の課題（詳細は注62を参照されたい）や前述した中華教育改進社第三回年次会における陶らのモンゴル教育方針を合わせてみれば、五族共同概念は教育の方法によって育成するという趣旨を示している。陶氏の提出したモンゴル教育方針の一項目である「モンゴル民族の独自性を保持させ、優れた点を更に発展させる」という内容は一見すれば、モンゴル民族の文化的な自立に賛同しているように受け止められがちだが、張氏の提出したモンゴル教育における重要な課題の中で「モンゴル言語文字を如何に漢字と同化するか」という点が第一の重要課題として挙げられている。さらに、張氏は、言語教育のほか、モンゴル人の宗教信念に対する対応にまで触れている。教育の中でラマ教に如何に対応するか、という点である。それに続き、教育行政の設置・モンゴル学生の内地留学に賛同する意思・教育実行に関する諸問題を国境防衛と結びつけて語っている。しかも、国境防衛に関わる辺疆教育をモンゴルだけに留めてはいけないと、国民や国事に興味を持つ人に向かって強調しているのだ。

一方、政治的に独立するガバナンスを失った民国領内の内モンゴル知識人にとって、五族共和論は、民族の自治を主張する理論的根拠でもあった。政治面での要因はさておき、経済面においても、テムゲトら近代知識人は、民国や漢人知識人の「援助」に頼らざるを得ない、困難の極地に置かれていた。こうした政治・経済による複雑な環境が、MBQのメンバーと漢人知識人の連携につながった。先述したテムゲトに与えた民国農商部と教育部による「文興奨」や30年免税の特権などもそうした連携の一環であろう。だが、当事者である陶氏も認めている通り、漢人知識人の強調する五族共和のためのモンゴル教育とモンゴル知識人の主張する民族教育における齟齬は消えなかった（前述の中華教育改進社第三回年次会における陶のモンゴル語の『民』という言葉の解釈を参照されたい）。やがて、モンゴルなど辺疆地域における漢人文化の影響は、教育制度や移民入植によって広まって行く。なお、それが今日まで続いていることは周知の通りである。

V、MBQ文化活動に見るテムゲトの志向

これまでMBQを軸にテムゲトの活動をたどってきたが、では彼の志向をどう理解すべきであろうか。彼は、グン王による人材養成のプロセスのなかで、最初は医学志願の学生として来日した。6年間の留学によって、日本的な価値観を身に付けたと言えよう。彼の言葉で言えば、「日本の学校で六年間勉強して、あまり知識を習得しなかったが、他国（日本—筆者）の礼儀と自分の民族を守ろうとする確乎たる精神を目の当たりにして、「心の病」にかかったようになった」。日本人の礼儀や「愛国心」が、何よりもテムゲトの心に響いたらしい。その響きが故郷の内モンゴルを思い出させ、「心の病」にかかったのだ。こうして、辛亥革命後の内モンゴルに戻ったテムゲトは、試行錯誤を繰り返しながら教育文化の軌道を追っていく。ジョスト盟→北京→南京→満洲国において、あらゆる可能性を試し、「教育啓蒙」の信念を一度も諦めていない。MBQをめぐる彼の出版活動は、民族主義的性格を強く帯びていたが、テムゲトにとっては文化的な自立が政治的自立より上位を占めていたようである。だからと言って彼は、『テムゲト伝』で紹介するほど政治に無関心なわけではない。内モンゴル人民革命党の多くのメンバーは、テムゲトと親交がある友人であり、彼が同党と近い思考を持っていたことは間違いない。上述したとおり『三民主義浅説』などの翻訳はそれを裏付けている。

テムゲトがMBQを結成後間もなく（1925年）『自伝』を書いたことは興味深い。勿論『自伝』は、モンゴル語活版技術の成功に至るまでの動機・経緯、MBQの出版事業を中心に書かれたが、本文で多く引用

したとおりテムゲトの教育・文化を重視する文化的ナショナリズムも至るところに浮んでくる。『自伝』を書いて以後、テムゲトは1939年に亡くなるまで彼自身の活動について何も書いていない。その意味で『自伝』は、一種の変わらぬ信念・或は変わらぬ志向—要するに文化的ナショナリズム—に生涯にわたって執着するというテムゲトのメッセージだったかもしれない。北京政府以後、南京政府と満洲国におけるMBQの幾度もの試みが、その強固な志向を示しているのではないかと考えられる。近代内モンゴルを取り巻く政治勢力が複雑なために、不安定な情勢が続いていた。近代知識人の思考や、活動を考察する際、そうした横軸の次元で、彼らの政治認識はどのようなものだったのか、そしてそれは当時の思潮のなかでいかなる位置にあったのかを検討する必要がある。同時に、近代知識人と旧来の文人との関連性にも注意を払い、モンゴル知識人の思想体系を縦軸において把握することも今後の重要な課題であろう。

本稿では、MBQ及びテムゲトを事例に、近代内モンゴル知識人の教育観と漢族との差異を中心に紹介した。教育の役割に対する明確な認識は、内モンゴルの近代化の歴史に空前の働きを果たしたのである。彼らの主張する「教育啓蒙」の意義は、内モンゴルにおける教育の近代化、民衆の啓蒙、伝統文化の保護などにとどまらない。今日の内モンゴルでも、民族教育の問題や伝統文化の衰退、知識人の自由思想の喪失など多くの課題に直面している。こうした意味で、近代知識人の啓蒙思想の持つ意義は非常に大きいと言えるのである。